

意識と小説

— 『天使も踏むを恐れるところ』に見る、手紙が与える意識の変化—

Consciousness and the Novel

—Some letters will change character's mind in *Where Angels Fear to Tread*—

大前 義幸

OMAE Akiyuki

Abstract

Forster (E.M. Forster, 1879 -1970) expressed in the subtitle of *Howards End* (1910) "only connect", his works were always about the connection between other people and different cultures. In his early works, he expressed the differences between England and Italy culture. As Noriyo Goda said, "Forster is a writer who captures the changing times in terms of content, but is generally regarded as an "old" writer in terms of method, which is more modest than his contemporaries."

However, in Forster's first work, *Where Angels Fear to Tread* (1905), many characters opposed to each other's cultures and values, causing a change in their attitudes. At the end of the story, a solution known as reconciliation showed a connection. In other words, people who appeared in Forster's works may have sought to solve problems by "connecting" each other's thoughts, values, and different ideas based on a broad perspective of the social problems of the time. Furthermore, by using the mail system that was popular at that time, some letters had various expressions and psychological effects on the characters.

From the above, we would like to focus on the changes in the characters' consciousness, conflicts, and conflicts caused by the delivery of letters using the postal system.

【キーワード】 異文化理解, 空間意識, 手紙, 比較研究,

<目次>

- I はじめに
- II 空間と意識の問題
- III 手紙がフィリップに与えた影響
- IV アボットに見る意識の変化
- IV おわりに

I はじめに

E. M.フォースター(E. M. Forster. 1879-1970)が、『ハワーズ・エンド』(*Howards End*.1910)の副題で述べている“only connect” (1) の意味が示す通り、¹彼の作品は終始一貫して、他者や異文化との結び付きがテーマである。特に彼の初期作品においては、イギリスとイタリアを舞台にした異文化との結び付き

¹ Forster, E. M. *Howards End*. Ed. Oliver Stallybrass. London: Penguin, 2000.

であり、男女の結び付きである。合田典世も述べているが、「フォースターは、内容的には変わりゆく時代を捉えながらも、方法的には「古い」作家という評価が支配的であり、同時代の作家と比べても地味な作家」としての印象を与えている。²

1905年に出版されたフォースターの作品『天使も踏みを恐れるところ』(*Where Angels Fear to Tread*)や第2作目『眺めのいい部屋』(*A Room with a View*. 1908)も、やや未熟な作品と言われているが、イギリスとイタリアという異なる文化において、登場人物たちの一瞬の非日常体験が彼らに与えた影響は大きく、そこで暮らす人々との結びつきを表している。内容は、イタリアという異国でイギリス人のリリア(Lilia)とイタリア人のジーノ(Gino)が結び付き、二人の間に赤ん坊が誕生し、義理の家族たちが幼子に触れたことで、フィリップ(Philip Herriton)とアボット(Caroline Abbott)が生の本質を理解し、彼らが想像していた生に対する概念を大きく変えたことは言うまでもない。つまり登場人物たちが、イギリス的価値観やイタリア的価値観、知的文明対自然という異なる世界の衝突をめぐり、葛藤、妥協、調和、展開していく個人対個人の関係という様々なパターンを追うことで、何かと結び付けようとする試みが見られる。だが、初期作品において、ギリシャ神話やファンタジーの要素が入り、寓話的な解決が散見されるため、イギリス的な階級制度、貧富の差、植民地支配における帝国問題など、当時の社会問題が排除されていることには、また別の問題が生じている。

フォースターの処女作である『天使も踏むを恐れるところ』は、異国の文化やお互いの価値観が衝突し合うことで、多くの登場人物の意識に変化が起き、物語終盤には和解という解決方法で、フォースターなりの結び付きを表すのである。つまり、フォースターの作品に登場する人々が、お互いの思想や価値観、異なる考えを「コネクト」することで、当時の社会問題を広く考えたうえでの問題解決を模索していたのではないだろうか。大英帝国であるイギリスが他国を植民地支配することで、また新たな問題が発生することを作者の考えとして、自身の作品内に提示していると考えれば、伝統的写実主義スタイルのモダニズム小説の新たな切り口が見つかるのではないだろうか。そのうえ、鉄道技術が発展したことで、郵便制度にも新たな改革が起きたのである。それまでの郵便とは、人から人へ手渡しで行われていたため、身近な人にしか手紙を渡すことができなかった。しかし、鉄道事業が発展したことで、鉄道を利用することで国内でも遠くの人へ手紙を送ることができることになり、さらには国外へ手紙を送ることもできるようにもなったのである。そのため、本作に描かれる手紙の描写においても、フォースターが描く登場人物たちの意識の変化や葛藤、意見の衝突などが繊細なタッチで描かれている。以上のことから、本作に描写されている手紙にも注目し、手紙が与える登場人物たちへの意識を中心に考察していきたい。

2. 空間と意識の問題

実際の作品分析に迫るよりも、19世紀の郵便制度を語る前に「時空間意識の変化」について触れておきたい。フォースターは、『小説の諸相』(*Aspects of Novel*. 1927)の中で、‘she[Gertrude Stein] has hoped to emancipate fiction from the tyranny of time and to express in it the life by values only.’と述べ、³小説を時間の圧制から解放することに対して断固反対している。つまり、彼が考える小説とは、‘the novel tells a story’であり、物語と要素、さらには連続する時間の関係を抜きにして小説を書くことができないと考えてい

² 合田典世「“Only one perfect view”としての小説—E・M・フォースター『眺めのいい部屋』を読む」『横浜国立大学教育学部紀要』(Ⅱ), 横浜国立大学教育学部, 2019, pp.23-31.

³ Forster, E. M. *Aspects of novel*. Ed. Oliver Stallybrass. London: Penguin, 2000, p.52.

る。⁴そのため彼の作品には時間の概念を強く表現し、物語に登場する人々が時間の存在を読者に伝える手法を用いて描かれている。また、彼は小説における時間の概念について、同書で次のように述べている。

I am trying not to be philosophic about time, for it is (experts assure us) a most dangerous hobby for an outsider, far more fatal than lace; and quite eminent metaphysicians have been dethroned through referring to it improperly. I am only trying to explain that as I lecture now I hear that clock ticking or do not hear it ticking, I retain or lose the time sense; whereas in a novel there is always a clock.⁵ (下線部論者)

フォースターが述べている物語上における「時間の概念」だが、本作品では郵便制度を導入することで、物語に時間の概念を生み出し、そこに登場する人々の意識を劇的に変化させることに成功したと思われる。そのため、イギリスからイタリアへ移動をする際の鉄道も、彼の作品の中では空間移動として大きな影響を与えているのだ。物語前半は動きの少ない展開であったが、リリアの死によって急速に物語が進んでいき、最後はフィリップとジーノの友情が生まれることで大団円へと導かれる。それでは、物語における時間軸の変化について作品冒頭の場面から見ていきたいと思う。

作品冒頭で、イタリア旅行へ出かけるリリアとアボットを見送るため、ヘリトン家が駅に集まり、無事に二人の見送りを終えて帰宅すると、2週間後にリリアの様子を伺う場面において、娘のアーマ(Harriet Irma)がヘリトン夫人(Mrs. Herriton)に母親の様子について聞いている。

'Grandmother,' dear; not 'Granny,'" said Mrs. Herriton, giving her a kiss."And we say 'a boat' or 'a steamer,' not 'a ship.' Ships have sails. And mother won't go all the way by sea. You look at the map of Europe, and you'll see why. Harriet, take her. Go with Aunt Harriet, and she'll show you the map.' (21)⁶

アーマは、母親であるリリアが船でイタリア旅行へ行ったと思っていたが、ヘリトン夫人から「鉄道」でイタリアへ出掛けたのだと訂正される。19世紀のイギリスにおいて、人の移動が船から鉄道へと変わったことで、移送も輸送も大量かつ迅速に移動を行うことができるように変化した。異国への移動に関して長時間必要であったが、鉄道技術が誕生したことで、迅速に人の移動を可能とし、さらには前述で指摘した郵便制度に対しても大きな影響を与えることになった。そのため、ヘリトン夫人とフィリップが雑談をしているとき、ヘリトン夫人が“*It's twelve! The second post's in. Run and see if there are any letters.*” (27)と叫ぶことで、読者へと新しい空間を提示することに成功したのである。それが、「時空間」である。つまり従来であれば、手紙とは信頼する召使や使用人や知り合いの手によって運ばれ、その伝達経路が近い人同士であった。⁷しかし、鉄道が誕生したことで大量かつ迅速に輸送と顔の見えない巨大な郵便網による日々の集配が始まると、書き手と読み手の間には時間的・空間的に特定の難しい独自の領域が

⁴ Ibid, p.53

⁵ Ibid, p.43

⁶ 以下、作品からの引用は Forster, E. M. *Where Angels Fear to Tread*. Ed. Oliver Stallybrass. London: Penguin, 2001.による。引用末尾の括弧内に頁数を記す。

⁷ リリアがヨークシャーの実家へ帰省をし、キングクロフト(Kingcroft)氏のことが好きになったと友人へ打ち明けた時、このことがヘリトン夫人に知られ、自身の身の振り方を手紙で送られて来た時には、リリアはソーストンから手紙を持って使いが来ると勘違いしていた。実際は、郵便配達員がリリアの実家へ手紙を届けていた。

展開するのである。つまりは、巨大郵便システムの導入により、いままで身近な人の手によって手紙が届けられていたが、鉄道事業を利用した郵便制度が誕生したことで、知らない人の手を経由して、国内外にまで手紙が届けることが可能になったのである。そのため、異国から届いた手紙を読むことで、内容によっては登場人物たちに対する意識にも変化を与えていることにも注目すべきである。

リリアがイタリアでの結婚生活を不満げに過ごしているとき、自らの結婚生活の過ちを正すためにヘリトン夫人へ手紙を送ったが、返ってきた手紙には、“[S]aying (1) that all future communications should be addressed to the solicitors; (2) would Lilia return an inlaid box which Harriet had lent her-but not given--to keep handkerchiefs and collars in?”(50) と書かれていた。この時の手紙は郵便制度を利用したことで、異なる土地から届いた単なる手紙であったが、リリアの意識に大きな変化を与えている。

"Silly fellow, no! I mean the life. Those Herritons are very well connected.

They lead Sawston society. But what do I care, so long as I have my silly fellow!" She always treated him as a boy, which he was, and as a fool, which he was not, thinking herself so immeasurably superior to him that she neglected opportunity after opportunity of establishing her rule. (50-1)

リリアがヘリトン夫人からの手紙を受け取った場面であったが、彼女にとっては、自らの考えを批判する内容であったため、自分よりも10歳も下のジーノを卑下し、自らが権力者のように振る舞う姿勢を示す。そして彼女は、かつて住んでいた家族を揶揄しては、イタリアでの生活に十分満足している高揚感を感じていく姿をジーノに見せているだけだった。

3. 手紙がフィリップに与えた影響

22歳の時に従兄弟たちとイタリア旅行を経験してから、イタリアの虜になってしまったフィリップであったが、その彼が24歳になる前に、未亡人であるリリアと牧師であるキングクロフト氏の誰にも知られることなく愛を紡ぐ姿を目撃したことで、彼はヘリトン夫人の眼から彼らを遠ざけるためにイタリア旅行を提案したのだ。それは彼が、“At twenty-two he went to Italy with some cousins, and there he absorbed into one aesthetic whole olive-trees, blue sky, frescoes, country inns, saints, peasants, mosaics, statues, beggars.”(70)という体験をしたことで、一気にイタリアに対する敬愛の思いが高まったからだ。そのため、彼がリリアにイタリア旅行を提案した時と同時に、アボットもリリアのイタリア旅行に付いて行くことを熱望したのである。その後、旅先から送られてきたリリアの電報には、リリアがイタリア人の男性と婚約したことが記されており、母親でもあるヘリトン夫人の命により、事の詳細を確認するためイタリアへ行くことになったのだ。しかし、フィリップは、“It was the first time he had had anything to do. He kissed his mother and sister and puzzled Irma. The hall was warm and attractive as he looked back into it from the cold March night, and he departed for Italy reluctantly, as for something common place and dull.”(31)と語り手が述べているように、あれほどイタリアを賛美していた彼が、寒い夜に家族から切り離された孤独の寂しさを肌で感じながら、イタリアへ出発する人物として描かれていることには注目すべきである。その後、彼がミラノから投函した到着時刻を知らせる手紙を受け取ったアボットが駅まで迎えに来た。アボットは、“And here she was in a *legno*, solitary, dusty, frightened, with as much to answer and to answer for as the most dashing adventuress could desire.”(34)であったが、それに対するフィリップの反応は、“Philip, whose one physical advantage was his height, felt annoyed at her implied indifference to it.”(36)と心に思いながら、彼の

口から出る多くの質問に口数少なく答えているだけであった。しかし、リリアの結婚を阻止する目的で来たフィリップであったが、すでにジーノとの結婚を済ませていることを知ると、不甲斐ない結果でアボットとともにソーストンへと帰る無能な人間になってしまったのだ。この時まで彼は誰からも手紙を受け取ることはなく、ただ母親に命じられるだけのあやつり人形であったが、その後、イタリアにいるジーノからの葉書でリリアの死を知ると、“He hated Gino, the betrayer of his life's ideal, and now that the sordid tragedy had come, it filled him with pangs, not of sympathy, but of final disillusion.” (71)と、あれほど憧れを抱いていたイタリアに対して、いまは憎しみを込めて“final disillusion”とまで感じるようになった。それまでの彼は、“All the energies and enthusiasms of a rather friendless life had passed into the championship of beauty.” (70)であったが、彼がジーノから受け取った葉書により、彼が異なる地にいながらもイタリアに対して思い描いていたイメージが大きく変えられたのは、郵便制度が発展したことにより安易に異国の人と連絡を取ることができるようになったことが原因である。彼にとっては容易に異国の状況を知ることができるため、ジーノからの葉書を読むことで知りたくもない情報を手に入れてしまったのだ。

フィリップに起きた、もう一つの悲劇と言え、リリアとジーノの子供を連れて帰ってくるために姉のハリエット(Harriet)と2度目に訪問したときである。アーマに送られてきた葉書の中には、ジーノからの葉書もあり、その中に “[A] little boy” として、母親がイタリアで男の子を出産したことが書かれていたのだ。つまりアーマは、母親の死よりも彼女が見たこともない子供の存在が気になり、何度もその子供について祖母であるヘリトン夫人へ質問をする。そして、イタリアにいるリリアの子供の存在がヘリトン家にとって大きな問題になることを危惧したため、フィリップとハリエットに再びイタリアを訪問させたのであった。しかし、再び母親にイタリアへ行くことを命令されたフィリップは、“I won't!” he shouted back. ‘I’ve been and I’ve failed. I’ll never see the place again. I hate Italy.’”(88)と悲痛な叫びも虚しく、イタリアへ行くことになったのであった。しかし、彼がイタリアに着くやいなや、“He now had every opportunity of seeing her at her best” (89)と不思議なことに最高の景色に会えたことに満足をしたのである。そして、ハリエットとの会話で、“Then he(Gino) tried to be less aggravating. “I heartily dislike the fellow, but we know he didn’t murder her (Lilia). In that letter, though she said a lot, she never said he was physically cruel.””(93)と、リリアが亡くなった理由は、ジーノが原因ではなく、何か他の理由が原因で亡くなったことを推察する発言へと変わっているのであった。フィリップがイタリアへ戻る時には、自らの失敗や母親のあやつり人形になっていることにも気付き、悲痛な面持ちであった。だが、イタリアから送られて来た手紙を読んだことで、嫌な記憶を思い出させる場所を何度も憎んでしまっていたが、改めてイタリアへ来たことで、彼の中で初めて訪れた時の情熱が呼び覚まされ、かつて憎んでいた相手を擁護する気持ちへと変わったのである。そのため、

‘My dear Miss Abbott, he is not a murderer. I have just been driving that into Harriet. And when you know the Italians as well as I do, you will realize that in all that he said to you he was perfectly sincere. The Italians are essentially dramatic; they look on death and love as spectacles. I don’t doubt that he persuaded himself, for the moment that he had behaved admirably, both as husband and widower.’(102)

と述べ、ジーノに対して激昂しているアボットの気持ちを静めるために気持ちを落ち着かせようと発言したイタリア人の素養について “The Italians are essentially dramatic” とまで語っている。なぜ、彼の気持ちがここまで変化したのか、改めて彼がイタリアに到着した時の語りのセリフを見ると、

Italy, Philip had always maintained, is only her true self in the height of the summer, when the tourists have left her, and her soul awakes under the beams of a vertical sun. He now had every opportunity of seeing her at her best, for it was nearly the middle of August before he went out to meet Harriet in the Tirol.

(下線部論者、89)

と語られているように、フィリップは最高の季節にイタリアへやって来たことへの高揚感と観光客がいない、イタリア本来の街並みに出会えたことに対して気持ちが高ぶっていたのであった。さらに、彼の気持ちを楽しませる出来事として、

Philip saw no prospect of good, nor of beauty either. But the expedition promised to be highly comic. He was not averse to it any longer; he was simply indifferent to all in it except the humours. These would be wonderful. Harriet, worked by her mother; Mrs Herriton, worked by Miss Abbott; Gino, worked by a cheque--what better entertainment could he desire? There was nothing to distract him this time; his sentimentality had died, so had his anxiety for the family honour. He might be a puppet's puppet, but he knew exactly the disposition of the strings. (下線部論者、89-90)

と、彼自身が母親の操り人形になっていることを自覚していながらも、彼の楽しみとして、この出来事の最後に起こる滑稽な結末を楽しみにしていることも、彼の気持ちを変えた大きな要因として考えることができる。そして彼らがオペラを鑑賞していると、偶然ジーノと再会し、ジーノへ手紙を書いたことを告げるが、残念なことにジーノが紙を開封することはなかったのであった。手紙の中には、18か月前にイタリアを訪れた時の悲痛な気持ちやジーノに対する思い、子供を引き取りに行ったが、会えなかったために直接彼の家へ置いてきた内容が書かれていた。もし、ジーノがフィリップの置手紙を読んでいたならば、その後の物語の展開は異なる結末であったかもしれないが、フィリップにとっては悲痛な気持ちが残る、最後まで後味の悪い旅になってしまった。

4. アボットに見る意識の変化

19世紀に誕生した巨大な郵便システムを利用することなく、誰からも手紙を受け取ることなく、一人で行動していた人物といえばアボットである。彼女は、ソーストンの田舎町で暮らし、日々の多くの時間を教会で過ごしていた人である。しかしある日、リリアがイタリア旅行へ出発することを知った彼女は、自身の単調な生活から刺激的な日々を送りたいために彼女に付いて行くという名目で、リリアと一緒にイタリア旅行へと出掛けたのである。しかし、旅先でのトラブルが原因で、リリアが手紙を出さないリストの中には彼女の名前が書かれていたのであった。

And Miss Abbott did likewise. Night after night did Lilia curse this false friend, who had agreed with her that the marriage would “do,” and that the Herritons would come round to it, and then, at the first hint of opposition, had fled back to England shrieking and distraught. Miss Abbott headed the long list of those who should never be written to, and who should never be forgiven. (下線部論者、61)

と書かれていた。イタリアでの生活時間を潰すために手紙を書くリリアであったが、彼女からさえもアボットには手紙が送られてくることはなかったのだ。つまり、手紙を受け取ることが人々の人生において、その人の考え方に対して大きな影響を与えることを意味すると理解できるのだが、誰からも手紙を送られてこないアボットは、他者から影響を受けることが少ないのであった。そのため、フィリップから“her crudity”(102)として笑われる一幕が起きることもあった。⁸

彼女は手紙を受け取ることで、彼女自身の考えに大きな影響が与えられることは無かったが、彼女に唯一影響を与えた人物は、亡くなったリリアとジーノの赤ん坊であった。彼女が一人でジーノの家へ行き、ジーノの再婚話を聞いていると、“To succeed where Lilia failed! To be your housekeeper, your slave, your – The words she would like to have said were too violent for her.”(121) と語り手でさえ彼女の語気が強いことを指摘している。ジーノが赤ん坊のために再婚することを知り、混濁する意識のなか、少しずつ彼女が赤ん坊へ視線を移していくと、“Gino passionately embracing, Miss Abbott reverently averting her eyes – both of them had parents whom they did not love so very much.”(125) と赤ん坊に対する慈愛の気持ちが高まっていく。そして、その小さな命に触れ、赤ん坊の体を綺麗にしようとすることで、彼女の心が浄化されるのであった。⁹フィリップやハリエツト同様に彼の赤ん坊をイギリスへ連れ帰り、ヘリトン家で育てるという計画に賛同していたが、“I’ve nothing to tell you,” she continued. ‘I have simply changed straight round. If I had planned the whole thing out, I could not have treated you worse. I can talk it over now; but please believe that I have been crying.’”(131)と語り、彼女のイタリアに対する気持ちやジーノに対する思いなど、すべてが浄化されるのだった。森道子も触れているが、「必要のない二人はあっけなく死んでしまう。皮肉をまじえて言えば、そこには無意識ながら自己犠牲があり、周囲の人々の浄化に貢献したのである」。¹⁰そして、ハリエツトが白痴の男に赤ん坊を盗ませ、雨のなかイギリスへ帰国の途へと急いで馬車走らせているとき、不運なことにもアボットが乗っている馬車とぶつかり、馬車が転倒したと同時にハリエツトが抱いていた赤ん坊が飛ばされ、赤ん坊が亡くなってしまうのであった。フィリップ一人がジーノのもとへ再度訪れ、赤ん坊が亡くなった事情を説明し、動揺を隠し切れず暴れる彼に謝罪を述べているとアボットがやってくるのである。そのとき、彼女はペルフェッタ(Perfetta)が用意した赤ん坊のミルクを二人に分けて飲ませる姿は、まさに聖デオダータ教会に描かれている聖母子の姿でもあった。このことがきっかけで、ジーノとフィリップは仲を取り戻し、リリアと子供の死を受け入れることで、彼らなりの結末を迎えたのであった。たが、フィリップにとっては満足した形で終わらなかったのである。そもそも彼は、リリアが結婚した事実確認と理由を聞くために母親から命を受けてイタリアへ行ったが、何も理由を知ることができずに未遂の形で終わってしまった。彼自身は、リリアが勝手に結婚したこと

⁸ 一人でジーノのもとへ行き、赤ん坊を渡してもらおう交渉をする前にフィリップへ置手紙を書き、彼がその手紙を読んだことでアボットに対する接し方が大きく変わったことは、その後の展開からも理解することができる。

⁹ フォースターは、『小説の諸相』の「登場人物」の章で、人間の出産に関する事実を扱った作家、あるいはその新しい事実を考案しようとした作家は、ローレンス・スターン(Laurence Sterne, 1713–68)とジェイムズ・ジョイス(James Joyce, 1882–1941)だけだと主張している。そして、ジョイスの出生に関する描き方が、様々な物を犠牲にしたうえで描かれていると考えている。このことからフォースターは、ジョイス同様に自身の小説に出生の場面を描くことで赤ん坊の存在を現し、リリアの死やアボットやフィリップに犠牲を払う物語展開を描いている。(60-1)

¹⁰ 森道子「トンネルを抜けて—Where Angels Fear to Tread と『雪国』の比較研究」『大手前大学人文科学部論集』、(4)、2003年、93-107。

で起きた出来事の結末を知りに再びイタリアの地へやって来たが、このような形で終わってしまったことに後悔した。さらにアボットの容姿や自らが、ことの責任を取る姿勢に対して惹かれ、最後に彼女へ告白をするが、やんわりと断られてしまうのだ。『小説の諸相』にも書いているが、フォースターは日常生活において頻繁に恋愛が起きるわけではないと主張している。¹¹そのため、この物語の最後の場面で、二人が結ばれる形で終わらせたのではなく、フィリップはアボットとの恋が成就できず、またアボットもジーノとの恋が叶わなかったため、誰一人も願った結末を迎えることはできなかったのである。この小説が人々の人生あるいは生き方について作者の切実な疑問と挑戦の姿勢にもとづいているならば、結末に近づいたところで登場する「寂しさ」という素朴な言葉が、フィリップとアボットの二人に当てはまるのではないだろうか。

5. おわりに

田中雅子が指摘している様に、「対立的な世界の衝突」（イギリス的価値観対イタリア的価値観、知的文明対自然など）をめぐる葛藤、妥協、調和、展開していく個人的人間関係を追うというパターンがこの作品にも見られ¹²ている。さらに、フォースターの作品では一貫して「結び付き」がテーマであり、互いに異なる文化的価値観の結び付きや、様々な人々との結び付きを描いている。本作品においては、様々な登場人物たちが、送られてきた手紙を読むことで、それぞれの価値観や考えに対して影響を受けたことで意識の変化が起きている。特にアボットに対しては、赤子の存在が彼女に大きな影響を与えている。しかし、本作においては登場人物が異なる土地から送られた手紙を受け取ったことで、彼らの意識に変化を与えており、さらに生まれてきたばかりの幼い生と結び付いたことで、彼らの中に存在する生の考えに対しても大きく影響を与えていると考えられる。

一方、イギリスで暮らしている娘へ手紙を送ったリリアだが、不幸なことにも彼女が書いた手紙はアーマには手渡らず、ヘリトン夫人によって妨害を受けてしまう。そのため、アーマには母親からの影響は与えられず、アーマからの手紙を受け取るはずであったリリアに対しても、彼女の性格が変わることもなかったのである。そして、リリアは終始一貫、“she was headstrong, but really her weak brain left her cold.” (64)な女性であった。

しかし、彼女が出産後に亡くなったと言う知らせを受けたヘリトン家は、“He had shocked half-a-dozen people, squabbled with his sister, and bickered with his mother. He concluded that nothing could happen, not knowing that human love and love of truth sometimes conquer where love of beauty fails.” (70-1)として、生活には何も変化が起こらなかったが、フィリップの心の中では、彼女の死が彼を憤慨させ、母親と口論するまでに何かしらの意識を与えたことには注目すべきことである。また、フォースター自身も『小説の諸相』の中で、時間の概念を表現するもっとも簡単で明白な出来事は死であると述べている。さらには登場人物たちが、死の場面に遭遇することで現実的に捉えてくれる何かを与えることにも言及している。¹³そのことを踏まえれば、おそらくこのリリアの死は、本作に登場する人々への意識の変化だけではなく、我々読者に対しても意識の変化を与えているのかもしれない。そのためヘリトン家にとっては、“The New Life initiated by them lasted some seven months.” (78)であったが、我々にとっては、数か月前まで一緒に生活を送っていた人が、亡くなった知らせを受けても喪に服さない家族に対して何か違和感を与えて

¹¹ Forster, E. M. *Aspects of novel*. Ed. Oliver Stallybrass. London: Penguin, 2000, pp.62-3.

¹² 田中雅子、『『ハワーズ・エンド』における中産階級のカントリーハウス』、『九州英文学』九州大学大学院英語学・英文学研究会、(59巻)、2017年。

¹³ Forster, E. M. *Aspects of novel*. Ed. Oliver Stallybrass. London: Penguin, 2000, p.50.

いる。そのことを山田美穂子も指摘しているが、「いわば失敗した人間群像を得意の題材とし、その功罪が近年ますます取りざたされている E. M. Forster」なのである。¹⁴そして彼女の死を読者が知ることで、作者は物語が明るい雰囲気の場合から死という暗闇の場合へと瞬時に移動させており、ヘリトン家の人々の生活へと場面が変わると、リリアの死が無かったこととして、瞬時に明るい雰囲気へとストーリーを展開させることにも成功しているのだ。つまりフォースターは、リリアがヘリトン家から送られてくる手紙を受け取ったことが原因で、彼女の気持ちを憤慨させる動機づけになり、その影響が自らを過ちの道へと進ませる姿を描いたことで、リリアに対する無知と軽率さを笑う皮肉を描いていたのであった。

しかし、フィリップのように手紙や葉書を受け取ることで、自らの誤った考えを改め、さらにはリリアとジーノの赤ん坊に触れたことで、生に対する意識にも影響を与えていることは間違いない。そしてアボットも同様に彼らの赤ん坊に触れたことで、混乱しているジーノと彼をなだめるフィリップにも赤ん坊の誕生、喜びと死の悲しみの二重の感情を与えているのだ。19世紀に誕生した郵便制度が、静かな物語の登場人物や語り手までも手紙が様々な影響を与えていることは、フォースターについて興味深い一面を示唆しているといえるだろう。また、この小説のタイトルが取られたポープ(Alexander Pope, 1688-1744)の『批評論』(*An Essay on Criticism*, 1711)に書かれているように、この作品を通して登場人物たちが「無知と軽率な行動を取る者を笑い、賢明かつ慎重な行動の大切さを取ること」の意味を教えている。

この小説のほとんどが意図的に、どこか弱々しく悲しい会話で終わることが多い。しかし、読後感は爽快であり、尚且つ、問題点が示され、様々な思索が展開されており、自己満足的な生活と自己主張的な生活との対比もされている。多くの登場人物たちは、自己満足的な生活から自己主張的な生活へと改換されたことで、感情を吐露する場面も描かれているが、決して彼らの中にある冷静さが欠けたわけではない。自らが行動したことで得た知識や過ちを経験したことで、彼らの中にある価値観がぶつかり合い、ぶつかり合ったことで彼らの中にある価値観が変容したのである。そして、フォースターの作品で重要なテーマである対立する価値観が、すでに描かれていることにも注目しておくべきである。さらには、本作で彼らが行動を引き起こす原因になったのが、19世紀に誕生した郵便制度を利用した手紙であったと考えれば、手紙が人の意識へ与える影響の大きさに改めて気付けるのではないだろうか。

¹⁴ 山田 美穂子 「“The Eternal Moment” のケース・スタディ : E. M. フォースターの Cosmopolitanism に関する考察」、『青山学院女子短期大学紀要 60 号』(15 巻)、2006 年、15-30。

参考文献

- Blackmore, Susan. *Consciousness An Introduction*. London: Hodder Education, 2010.
- Finkelstein, Blumenthal. *Bonnie. Forster's Women. Eternal Differences*. New York and London: Columbia UP, 1975.
- Forster, E. M. *Where Angels Fear to Tread*. London: Penguin, 2001.
- . *The Longest Journey*. London: Penguin, 2001.
- Gennaro, J. Recco. "Consciousness and Concepts. An Introductory Essay." *Journal of Consciousness Studies*, 14, 9-10, 2007, pp.1-19.
- Lodge, David. *Consciousness and the Novel*. Massachusetts: Harvard UP, 2002.
- . *Thinks...* New York: Penguin Books, 2001.
- Mendilow, A. A. *Time and the Novel*, New York: Humanities Press, 1972.
- Tucker, Roberta. "Disorientation, Reorientation, A Compulsion to Explain." *Journal of Consciousness Studies*, 11, 5-6, 2004, pp.5-20.
- 川端柳太郎『小説と時間』，東京：朝日新聞社，1978年。
- 蔵持不三成『時間の歴史』，東京：原書房，1986年。